

宮沢賢治は1896年に岩手県の花巻市へ生まれた。花巻市には貧乏のような農家が多くて宮沢は助けたかったから、1918年にもりおかの農業学校で農業技術を勉強した。25歳の時、卒業後に農業学校の先生になった。しかし、父親や父親の会社とうまくいかないから東京へ引っ越して作家になった。宮沢は胸膜炎があって、1933年に急性肺炎で亡くなった。

さくたろうはぎわらという作家から強く影響を受けた。宮沢の書いた物語はほとんどは子供向けで、動物や植物や自然がたくさんでてくる。人間が動物や植物や自然と一緒に暮らせる世界が理想的だと考えた。

「よだかの星」は1921年に書いた。主人公はよだかという鳥でどこかの森や空に起こる。よだかは弱く小さな鳥で他の鳥はほとんどいやと思っている。小さいし、顔は味噌をつけたようにまらだし、くちばしはひらたいし、あまり美しくない。他の鳥は見るだけいやになるという具合だった。ある日、鷹という鳥はよだかの家に来て「後二日に名前を変えなかったら殺すよ」と言われた。よだかの名前の中に「たか」が入っていて鷹はよだかと関係が欲しくないからです。しかし、よだかによって「たか」が入っている名前が非常に大切だから、変えたくないだ。そのため、空へ飛び上がって連れるに決めた。最初に、お日様に連れようとしたが、「よだかは夜の鳥でしょう。だから星空に頼みなさい」と言った。その夜、よだかは空へ飛び戻って星空に連れようとした。しかし、西の星や南の星や北の星や東の星に聞いても、全体はいやと言った。よだかは死にそうくらい疲れていてまさにあきらめたが、最後に一生懸命でまっすぐに空へ飛び上って行って、カシオピア座を見つけて星になった。

この話については、悲しそうだが、いい話だと思う。よだかは弱いし、友達があまりいないし、他の鳥は見るだけいやの気持ちになるし、かわいそうな生活がでてきた。しかし、弱くてもみんなはいやと書いていても最後に一生懸命で飛んで星になることができた。絶対難しそうだが、全然あきらめなかった。話のテーマは一生懸命でしたら何もできるという教訓があったと思う。よだかは弱いし、友達があまりいないし、みんなはよだかがきらいし、しかし、最後に一生懸命に飛び上がって星になることができた。他の人の意見を気にしなくてしたいことをすればいいという考え方が反映していると思う。

面白いことに鷹は名前を変えなさいと言った時、よだかは変えなかった。殺されたほうがいいと言った。よだかは弱い鳥だが、鷹が名前に入ったからちょっと強い気持ちをくれるからよだかによって非常に大切だ。名前を変えることより死んだほうがいい気持ちが印象的だと思う。

一つに分からないことはどうしてカシオピアの座だ。西の星や南の星や北の星や東の星がいやと言っても、他の星がたくさんあるから、「宮沢はどうしてカシオピアを選んだかな」と思っていた。他の分からないことにどうして他の鳥はよだかがきらだった。よだかは美しくなくても、やさしそうな鳥だと思っていた。美しくないという理由だけあれば、あの鳥たちがちょっとバカだと思う。

自分の生活については、違いことに私の生活がそんなにかわいそうではないと思う。たくさんいやと思っている人がいないし友達や家族がいるし他の人と問題があまりないからだ。何かしたい時、支える友達や家族がいると思う。一方で、よだかはほとんどの一人だ。しかし、私の生活の中に同じような死にそうく

らい難しいことにキャップストーンが起こっている。たくさん勉強したり寝る時間や食べる時間があまりないしストレスがどんどん増えてきたからだ。しかし、「よだかの星」によると、一生懸命にキャップストーンをしたら絶対できる。